

今回5つの大学から20のポスターが寄せられました。

テーマは、自然、スポーツ、地域DMO、オタク文化、休暇制度、ユニバーサルツーリズム、ダークツーリズム、コンテンツツーリズム、観光教育、観光政策、ペットツーリズム、ファンダム、メディア利用など、大変な広がりがありました。ポストコロナに入ったことで、学生さんたちの調査研究の自由度が格段に大きくなったことが、こうしたテーマの広がりの一因かもしれません。

投票は、学生・一般・そして院生、合計84名が投票くださいました。

そのなかで「最優秀」に選ばれたのは、獨協大学の毛塚依玲、中村遥、新島琴乃、大口有香さんによる、「ピコツーリズム実験—冷たい世界を熱く観る観光の研究と実践」でした。マクルーハンのホットメディアとクールメディアの議論を援用しつつ、ポストコロナ下の観光として、「ピコツーリズム」という新しいアイデアを発想し、それを実験した結果に基づいた考察、という大変野心的な試みの報告でした。また結論も、範囲(=情報)の制限に加え、自ら思考し言語化するプロセスが参加者を熱くした、という発見があり、観光論と情報論の両方に示唆をもたらす優れた報告で、得票数も抜きん出ていました。さて、「優秀賞」には、以下の3報告が選ばれました。

立教大学 西野月、森あこ、木村千奈都、町山奈々美さんによる、「ペット・ツーリズムが照らす現代社会」、和歌山大学の野田優さんによる、「妖怪文化の観光利用についての分析」、愛媛大学の池田こころ、永本瑞季、湯谷夏生さんによる「K-POP ファンダムがバーチャルプラットフォームに構築する観光空間の特性—コロナ以後の K-POP コンテンツとファンダムの変化に着目して」です。

まず1つ目のポスターは、最近注目を浴びつつあるペットをめぐる観光の実態を調べて整理したことも十分評価に値するうえ、考察ではポストヒューマニズムという現代思潮を補助線としてペットツーリズムが内包する二面性を示すなど、理論的にも高いレベルの報告となっていました。

2つ目の妖怪文化の観光利用に関するポスターは、これも全国で妖怪文化が観光コンテンツとして利用されていることは知られていたものの、それを丹念に調べて整理した点がまず評価されるうえ、それらを、「既存のコンテンツの有無」と「文化のタイプ」によって4つの類型に区分するという分析をしてその特徴を明示し、観光学からみた妖怪文化の特徴を言葉化した点にはオリジナリティがあり、高く評価できると思われます。

3つめの K-pop ファンダムに関するポスターは、まず K-pop の発展と韓国コンテンツ産業の推移を明快な図にまとめたうえ、K-pop ファンの活動変化をコロナ前後という時期区分によって明らかにしたあと、とくにそれらが各種 SNS などバーチャルなプラットフォーム上にどのような変化として現れているかを詳細に示した力作です。とくに結果を表現した図表のわかりやすさと内容の深さは、当該の現象についてしっかりと議論や考察を深め

ていった様子が見れていました。

最後に、ご指導いただいた各大学の先生方に感謝申し上げます。